



先月、山にテントを張った二人のおじさんは考えた。担ぎ上げた酒の量と、そのあっけない終わり方について。「俺たちが特別ノンペイと言うわけでもないと思うんだ。ただの酒飲みと言うフツのおじさんであることは確かなんだ。そして、互いに担ぎ上げた酒の量を足すと、まあ、あっという間に終わるって言うもんでもない気がするんだが、ああも早く終わってしまうってのは困ることで、この問題について今われわれはよく考えて結論をみちびきださなきゃいけないって寸法だ。」「それに最近はずっと酒に弱くなっているってことも確かな現実だしなー。」「体力だって落ちてきているから、そうは担ぎ上げられないしねー。」「まあ、こうなるってことは、メンバーを考えればわかるってもんだが、それでも何がしかの結論が必要だねー。」「飲まないってわけには行かないしねー。」「朝、駅で一杯やってから行くってのもあれも儀式だからねー。山の神様に敬意を表しているってわけで、まげるわけにやあいかないねー。」「そうだねー。まあ、この間みたいに、ワンカップ片手に飲みながら登ってのはよしたほうがいいかもしれないねー。」「まあ、お互い相手が相手だからねー、あきらめもあるんですが・・・。」「そこで、いろいろ考えてみたが、大体、カップが大きすぎるんだよ。」「どんな器が出ても飲み方は変わらないとは思いますが。」「ぐい飲みや、杯で適度にやればもっと長持ちすると思うんだ。」「うーむ、そうかも知れないなー。」「そうだ、きっとそうに違いない。」そこで二人は決然と、きっぱりと、宣言した。「よし！今度からは、酒はぐい飲み、杯以外は禁止だ！」それからしばらくカウンターで飲んでから彼が行った。「僕たちって、高尚な話ってしてないねー。」

そしてある峠のすぐ下、きらきらと光る流れが美しく、さわやかな緑のトンネルに囲まれた場所で二人はぐい飲みと杯を握りしめて笑っていた。もう、誰にも会わないかと思ったが、下のほうから葉影にちらちらと人影が見え始め、昔ながらの正統派山女二人づれが登ってきた。「いやー、荒れてますねー。最初の沢ははだしになって渡るしかありませんでした。」とにこやかに声がかかる。こっちも、そうなのだ。岩をいくつも投げて飛び石を作ろうとしたが、流れのほうが元気で、結局靴を脱いで渡り、それから何度か、危うく沢を渡り返し、山が抜けて道がなくなってしまった跡をおっかなびっくり這うように登ってきたばかりなのだ。「でも、気持ちのいい流れでしたね。」と登っていく彼女たちの足元は重い皮の登山靴であった。

峠を越えて、あいかわらずぼろぼろの沢筋を下りきると大きな谷が広がっていた。空は真っ青で、広い川原に流れはとうとうと流れ、人影はなかった。家ぐらいの大石が散在していて荒れたときの様子がしのばれる。川原で火を使い、ゆっくり飯にする。清冽な流れの傍らにただいて気持ちが晴れ晴れしてくるが、そんなところでゆっくり飲むのもいいものだ。帰りは流れの脇の林道を快調にひた走る。たまにいる人を追い抜いてゆく。流れは幅広く穏やかに流れていたと思ったら、時に2m程度に狭まり、ゴーゴーとほとばしっていく。車は止めてあるけれども、立派なトンネルも完備していて、穏やかな気持ちでトンネルに入っていったらゆるいカーブ。そして真っ暗になってしまった。何も見えないのだ。目をつぶっても開けても何の変わりもない暗闇。手探りで懐中電灯を出して通り抜ける。「びっくりしたねー。」とうそのようなカンカン照りの道端でもう一杯飲んでひとしきり話して出発。じきに3時間の道のりを2時間で抜けきった。杯の効果はあったのかなかったのか。その夜は検診のための話が続き更に杯が進んだ。